

欲望の赴くまま、己を解放せよ

カレーパン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほぼ全ての人間が個性という超能力を持つ個性社会という現代社会とは全く違う社会になつても、結局人の本質は変わらない。己の欲望のままに動くのが人間だ。ヴィランだのヒーローだの、洒落た言葉で着飾る必要はない。欲望を解放し、己の欲することをなせ。

目
次

欲望の赴くまま、好きなことを為せ
犯罪組織

欲望の赴くまま、好きなことを為せ

「母ちゃん、たつだいまー！」

麗日お茶子は雄英高校の入学試験を受けて関西の実家に帰つてき
ていた。入学試験の手応えを話そつとるんるん気分で家の扉を元氣
よく開けると、そこにはいつもの景色が無かつた。

異臭がした。死臭がした。

臭いを嗅いだお茶子は返事がないことも含めて、嫌な予感が頭をよ
ぎつた。急いで靴を脱いでリビングに向かう。

リビングのドアを開けたお茶子の目に飛び込んできたのは赤色
だつた。

「……え？」

頭と四肢と胴体がバラバラにされて別々の場所に付け替えられて
いた父親だつた何かと、ぽとりと離れた所に落ちている母親のと思わ
しき片腕と片足。

お茶子は何が起こつているのか全く分からなかつた。昨日電話し
た時は両親は二人とも元気だつたし、入学試験を受けるお茶子を勇氣
付けてくれていたはずだ。そして今日の朝も電話で母親の声を聞く
ことができたのだ。

しかし今日の前にいるのは、物言わぬ肉塊と、母親の体の一部だけ
だ。

お茶子はあまりの惨劇に呆然としていた。すると突然、画面が暗く
消されていたテレビの電源が突然つき、お茶子はそちらに目を向け
る。

テレビから嬌声と泣き声、懇願が聞こえた。映し出された映像は母
親が仮面を付けた男に犯されている映像だつた。

お茶子は思わず嘔吐した。いくらヒーロー志望とはいえ、普通の女
の子がこの惨状に耐えられるわけもなく、それは当たり前の反応だつ
た。

お茶子が現実を受け入れることができず震えている間に、長い長い
その映像が終わる。

そこには”地獄より、感謝を込めて”とのメッセージが英語で表示されていた。

☆☆☆

「いやはや、あの夫の絶望と恐怖はとても愉しかつた。この私も多いに満足だよ」

黒いシルクハットとフロックコート、そしてベストをきつちり着込んだ、如何にも英國紳士然とした長い髪を蓄えた老人はニコニコと笑いながら眼鏡をかけている見目麗しい少女とともに街の裏路地を歩いていた。

「ボクもとても楽しませて貰つたよ。やつぱり夫の前で妻を傷つけて犯すのは最高だなって」

「……正直、私は強姦とか好まないんだがね。まあ、君たちの欲望を邪魔するのは約定に反するからどうでもいいが。しかし、君は仮にもヒーローなのだから少しはヒーローらしく謹んだらどうだい？」

少女の発言に少し呆れながら宥める英國紳士に対して少女は持っている黒い袋、ちょうど人一人くらいが入りそうな袋を指差した。「だつて、こいつが如何にも気持ち良さそうな体してたからさ……ついボク勃起しちゃつたんだよねえ。勃起しちゃつたら仕方がないじゃん。生理的現象なんだし」

「はあ……全く、君たちの変態性にはいつも気持ち悪いと思わされるよ。こんなのが同僚とは全く最悪だね」

「そんなこと言わないでよ”ジャック”！」ボクは君のことを親友だと思つてるんだからさ」

馴れ馴れしく英國紳士——”切り裂きジャック”の肩を叩く少女、いや少女のように見える少年——”ハイルブロンの怪人”に対してジャックはあからさまにため息をつく。

いや、一応友達だし、師匠関係でもあるのだが……女性は英國紳士

らしく優しく殺すのがジャックの流儀であつて、ハイルブロンのやり方はジャックの好みではない。ジャックの内心は正直複雑であつた。ハイルブロンとジャックは生きた人間を用意するという任務を遂行するために適当な人間を探していたのだが、この性欲魔神男の娘が今袋の中にいる妻を見た瞬間この女がいいと言つて聞かなくて仕方なく夫婦の後をつけて夫婦の家に転がり込んだのだ。独り身の方が殺すのが楽なのに態々、だ。

任務の邪魔だし、気持ち悪いしでジャックは正直この性欲魔神が嫌いなのだ。友達だが。

「はいはい、私も一応友達だと思っているさ、一応ね」

「釣れない反応だなあ、ジャックは。照れなくてもいいのに……」

「照れてないよ」

「嘘をつかなくともいいよー」

「本当だよ。照れてないぞ」

この二人の犯罪者達はつい先ほど人を殺し、犯したと思わせないほど陽気に会話しながら、ふらりと裏路地の奥へと消えていった。

この世界に一人の孤独な復讐鬼を生み出して。

犯罪組織

ある街の地下。

「はい、メンゲレ！新鮮な人間だよ」

「君が犯してゐるから新鮮ではないのでは」

茶々を入れたジャックに対し蹴りを軽く入れながらハイルブロンは黒い袋から片腕と片足がらない女を出す。気絶していて、意識はないようだ。

その女の状態を見て、メンゲレと呼ばれた男——死の天使メンゲレはため息をついた。

「駄目じやあないか、貴重な研究材料に傷を付けては。だからハイルブロンに頼むのは嫌だつたんだ。ジャアアアアツク！ しつかりと見張つていたんじやないのかア!?」

「見張つっていても言うこと聞かないのだよ、ハイルブロンは割と股間で物事を考へるからね……。寧ろなんとか生きて持つてきたことに感謝して欲しいのだが」

ジャックのその点に関してはどうしようもないというという態度にメンゲレは頭を抱えて嘆く。

「どうしてこんなのがばかりが同僚なんだ……ああ、クソどもめ、クソどもめが!! 全て奴らのせいだア！」

メンゲレは突然頭を搔き筆り叫びだした。ハイルブロンとジャックはいつもの発作と言わんばかりにスルーして研究室を後にする。

研究室を後にして報告の為にある部屋に向かう必要があつたためにメンゲレのいつもの発作に構つてゐる暇はないのだ。というかメンゲレ程度の変態なら本当に優しい方なので感覚が麻痺しているとも言える。

そして目的の部屋に入ると片眼鏡をかけた青年と、ぽやぽやとしている高校生くらいの少女がいた。入ってきた一人に対し二人にニコニコと手を振つてきた”暗殺の天使コルデー”に対してジャックは軽く会釈を返し、片眼鏡の青年の方を向く。

「やあ、そろそろ来ると思つていてたぞ、ジャックにハイルブロン」

「はい、ただ今帰りました”教授”。ボクたちが今日確保した人間で今回の採集は終了でよろしいですか？」

「ああ終了でいい。これだけあればメンゲレの研究も進むだろう。君たち二人とも一週間お疲れ様、次の集会までゆっくり休みたまえ。集会以外に何かあつたら”コルデー”を通して連絡するとも」

「了解です。では」

普段の様子からは考えられないほど真面目に返すハイルブロンにジャックは相変わらず笑いそうになるが堪えていた。我らが敬愛する”教授”の前だからハイルブロンもまともになるのも当たり前だが、やはり普段とのギャップが酷すぎる。

この組織に所属する者全員が、”教授”を名乗るこの青年に集められたのだ。元傭兵や、処刑人、家具屋……様々な人間がこの組織には所属している。職業も国もバラバラな人間たちが教授のカリスマ性に惹かれて集まつた。ハイルブロンでさえ教授の前では大人しくなるのも道理というわけだ。

退出した二人を待つていたのは”キングズベリー・ランの屠殺者”という名を与えられた少女だった。少女はジャックとハイルブロンを見ると無邪気に走り寄つてくる。血塗れの格好で、誰かの腕を片手に持つて。

「あ、ジャックとハイルブロンだ！任務終わつたの？」

「やあキングズベリー。任務はついさつき終わつた所だとも」

任務が終わつたという話を聞いて、キングズベリーの顔がぱあつと明るくなる。

「じゃあ一緒に遊ぼう！ ハイルブロンもジャックも！」

「ボクは構わないよ、暇だし。ジャックはどうする？」

「ふうむ、ゆっくり寝ようかと思つていたが……まあいいか。私も同行しよう」

やつたー!!と誰かの腕を持つてはしゃぐキングズベリー。ジャックはその様子を微笑ましそうに見た。

「いやはや、子供が楽しそうなのは良いことだよ」